

日本民話やグリムおよびアンデルセン童話に登場する果実や野菜をはじめとする食物について

誌名	農業および園芸 = Agriculture and horticulture
ISSN	03695247
著者	平, 智 川野, 美保 山崎, 雪恵 小岩井, 優 宮沢, 喜一
巻/号	84巻7号
掲載ページ	p. 715-722
発行年月	2009年7月

日本民話やグリムおよびアンデルセン童話に登場する 果実や野菜をはじめとする食物について

平 智*・川野美保*・山崎雪恵*・小岩井 優*・宮沢喜一*

〔キーワード〕：日本民話，グリム童話，アンデルセン童話，食物，人間・植物関係学

1. はじめに

飽食の時代といわれる現代であるが、われわれが日々食べているものに関する情報はどのような形で後世へと伝えられていくのだろうか。情報社会においてはおそらく、おびただしいほど出版されている料理本やレシピ集がその役割の主な部分を担うものと思われる。では、活字や写真（映像）の文化や技術がまだ十分に発達していなかった時代の食文化についてはどうだろう。当時の人々はいったいどのような食物を食べていたのだろうか。

古くから語り継がれている民話や童話には、その物語が生まれた時代や地域の生活習慣や食文化などが色濃く投影されていると考えられる。そこで、本稿では古い時代のわれわれの食生活の一端を知ることが目的として、日本とヨーロッパにおいて長く語り継がれ、それぞれの地域の食生活や生活文化が投影されていると考えられる日本民話とグリム童話およびアンデルセン童話を素材にして、それらに登場する果実や野菜をはじめとする食物について考えてみた。

2. 日本民話

(1) 調査方法

『ふるさとの民話（全 47 巻）』（日本児童文学者協会編 偕成社 1983）に収録されているすべての民話（1,509 話）を対象にして、それらの中に登場するすべての食物を拾い出し、『五訂食品成分表』（香川 2002）に基づいて分類した。

まず、民話の中に登場するさまざまな食物の種類数と登場回数（一つの民話の中で同じ食物が何度も登場する場合はそれを 1 回としてカウントした）を

算出し、どんな食物が最も多く登場するのかランキング表を作成した。

また、食物のうち、とくに果実と野菜に注目して、それらがそれぞれの民話の中で果たしている役割を「文出」と「単出」に分類した（河合 2003）。ここで、「文出」とは、文脈の中である単語が重要な役割を果たしている場合であり、「単出」とは文脈の中で深い意味を持たない単語としてのみ表出している場合である。

「文出」の例としては、たとえば「桃太郎」の「桃」が挙げられる。「単出」の例としては、「秋になりリンゴが赤く実った」といったような季節を表す表現に用いられる場合や、「旅人が村を通りかかると村人が川でダイコンを洗っていた」などのように、風景を構成する要因の一つとしてのみ表出している場合などがある。さらに、登場した食物の地域性や時代背景などについても考察を試みた。

(2) 調査結果

収録されている民話 1,509 話のうち、何らかの食物が 1 回でも登場するものは 956 話で、全体の 63.4%であった。また、登場する食物は全部で 474 種類で、それらののべ登場回数は 2,096 回であった。

都道府県ごとに登場する食物の種類数と登場回数を食物が 1 回でも登場する民話数で割り、1 話あたりの登場種類数と登場回数を算出した。紙幅の都合で詳しいデータは省略するが、地域によってかなりの差異が認められた。

食物が登場する民話の比率が最も高かったのは北海道の 88.5%で、最も低かったのは栃木県の 43.3%であった。1 話あたりに登場する食物の種類数については、岡山県の 2.6 種類が最も多く、山梨県が 0.9 種類で最も少なかった。全国をひとまとめにすると、1 話あたりに登場する食物の種類数は 1.6 種類、登場回数は 2.2 回であった。

次に、1,509 話に登場したすべての食物を『五訂

*山形大学農学部 (Satoshi Taira, Miho Kawano, Yukie Yamazaki, Masaru Koiwai, Kiichi Miyazawa)

表1 日本民話(1509話)に登場する食物の種類数と登場回数

順位	種類数			登場回数		
	食物	回数	(%)	食物	回数	(%)
第1位	魚介類	119	(25.1)	穀類	595	(28.4)
第2位	穀類	67	(14.1)	魚介類	458	(21.9)
第3位	野菜類	55	(11.6)	嗜好飲料類	238	(11.4)
第4位	肉類	29	(6.1)	野菜類	191	(9.1)
第5位	菓子類	28	(5.9)	豆類	97	(4.6)
第6位	果実類	25	(5.3)	果実類	85	(4.1)
第7位	豆類	25	(5.3)	菓子類	79	(3.8)
第8位	嗜好飲料類	22	(4.6)	いも類およびでんぷん類	75	(3.6)
第9位	いも類およびでんぷん類	20	(4.2)	調味料および香辛料類	64	(3.1)
第10位	種実類	12	(2.5)	肉類	56	(2.7)
第11位	調味料および香辛料類	12	(2.5)	種実類	33	(1.6)
第12位	きのこ類	10	(2.1)	藻類	21	(1.0)
第13位	藻類	6	(1.3)	きのこ類	17	(0.8)
第14位	卵類	4	(0.8)	卵類	15	(0.7)
第15位	砂糖および甘味類	3	(0.6)	砂糖および甘味料類	10	(0.5)
第16位	油脂類	3	(0.6)	油脂類	7	(0.3)
第17位	乳類	1	(0.2)	乳類	3	(0.1)
第18位	調理加工食品類	0	(0.0)	調理加工食品類	0	(0.0)
—	その他	33	(7.0)	その他	52	(2.5)

食物の分類は『五訂食品分類表』(香川 2002)に基づく。ただし、「その他」は同書によって分類できなかったもの。()の数字は全体に占める割合を示す。

食品成分表』に従って、1. 穀類、2. いも類およびでんぷん類、3. 砂糖および甘味類、4. 豆類、5. 種実類、6. 野菜類、7. 果実類、8. きのこ類、9. 藻類、10. 魚介類、11. 肉類、12. 卵類、13. 乳類、14. 油脂類、15. 菓子類、16. 嗜好飲料類、17. 調味料および香辛料類、18. 調理加工食品類の 18 種類に分類した。ただし、同書によって分類できないものについては「その他」とした。

分類の結果、1,509話に登場する食物のうち、最も種類数が多かったのは魚介類の119種類で、以下、穀類の67種類、野菜類の55種類、肉類の29種類、菓子類の28種類、果実類と豆類がともに25種類の順であった(表1)。

このように、日本民話に登場する食物は魚介類が最も多かったが、その理由として、日本が島国であり、全国津々浦々に海産物資源が豊富にあることが挙げられよう。なお、第1位の魚介類と第2位の穀類、さらに第3位の野菜類をあわせると全体の約半数を占めた。

登場回数については、主食である米を含む穀類が595回で最も多かった。第2位は魚介類の458回であり、以下、嗜好飲料類の238回、野菜類の191回、

表2 日本民話(1509話)に登場する果実類の登場回数

順位	果実名	登場回数	(%)
第1位	モモ	11	(12.9)
第1位	木の实	11	(12.9)
第3位	カキ	10	(11.8)
第4位	ミカン	9	(10.6)
第4位	スイカ	7	(8.2)
第6位	ナシ	6	(7.2)
第7位	イチゴ	5	(5.9)
第8位	梅干	3	(3.5)
第8位	リンゴ	3	(3.5)
第8位	つるしガキ	3	(3.5)
第11位	アケビ	2	(2.4)
第11位	くだもの	2	(2.4)
—	その他 ^z	13	(15.3)

z: 登場回数が1回の果実は「その他」とした。

()の数字は全体に占める割合を示す。

豆類の97回、果実類の85回の順であった。

第1位の穀類と第2位の魚介類の登場回数を合わせると全体の約半分を占めた。また、嗜好飲料類には酒や茶が含まれており、それらの登場回数が多かった。なお、野菜類の登場回数は第4位、果実類は第6位とあまり多くなかったが、両者についても

表3 日本民話(1509話)に登場する野菜類の登場回数

順位	野菜名	登場回数	(%)
第1位	野菜	29	(15.2)
第2位	ダイコン	26	(13.6)
第3位	トウガラシ	8	(4.2)
第3位	ニンジン	8	(4.2)
第3位	ヨモギ	8	(4.2)
第3位	ナス	8	(4.2)
第7位	カボチャ	7	(3.7)
第7位	キュウリ	7	(3.7)
第7位	タケノコ	7	(3.7)
第7位	ワラビ	7	(3.7)
第11位	ウリ	6	(3.1)
第11位	ナツパ	6	(3.1)
第13位	ネギ	5	(2.6)
第13位	ゴボウ	5	(2.6)
第15位	フキ	4	(2.1)
第15位	ゼンマイ	4	(2.1)
第17位	たくあん	3	(1.6)
第17位	山菜	3	(1.6)
第19位	アマウリ	2	(1.0)
第19位	ショウガ	2	(1.0)
第19位	ユウガオの実	2	(1.0)
—	その他 ^z	34	(17.8)

z: 登場回数が1回の野菜は「その他」とした。

()の数字は全体に占める割合を示す。

う少し詳しく調べてみた。

調査の対象にした1,509話の民話に登場する果実類の種類別登場回数をみると、最も多かったのはモモと「木の実」(以下、本稿ではグループ名を示すと思われるものには「」をつけることにする)の11回、第2位はカキで10回、以下、ミカンの9回、スイカの7回の順であった(表2)。このことから、より多く登場している果実類は日本に比較的古くからあるものであるということが出来る。

一方、野菜類の登場回数の第1位は「野菜」の29回で、第2位はダイコンの26回、以下、トウガラシ、ナス、ニンジンおよびヨモギがいずれも8回であった(表3)。

民話に登場する果実と野菜の文中における役割についてももう少し深く考察するために、登場する果実と野菜を「文出」と「単出」に分類してみた。話の中で「文出」としての表出が多いものほど、その民話内で果たす役割が重要であると判断できる。

民話に登場した果実数を「文出」の回数が多い順に並べてみると、ミカン、モモ、カキの3種類の果

実が上位を占めた。

具体例としては、船乗りたちが江戸まで必死にミカンを運ぶ話、千万長者が樹上のミカンを手を使わず取った娘を嫁にする話、食べてはならないモモを食べるとモモが川となり、娘と離れ離れになってしまう話、病気の乙姫がモモを食べると元気になった話などが挙げられる。

今井敬潤は、彼の著書『柿の民俗誌—柿と柿渋』(現代創造社 1990)の中で、『日本昔話集成』(関敬吾 1957~1968)に収録されている「猿カニ合戦」、「瓜子織姫」および「継子と鳥」の三つの昔話の中で柿がどのような役割を担って登場しているかについて考察している。それによると、一つはカニや猿が食べようとしたおいしい甘い実をつける木、もう一つは瓜子姫をくくりつけたり、死体をつり下げる木、いま一つは継子の死体を埋める場所の目印となる木で、食べることを「生」と解釈すると、生と死の両極面に深く関わる役割を柿という果物が果たしている姿が浮かび上がってくると述べている。

また、同氏は「瓜子織姫」の話では柿の代わりとして、桜(青森県)、桃(秋田県)、栗(宮城県)、李(山形県)、梨(岐阜県)などが登場する例も認められること、そして、それはその地方の庭先や屋敷内にある「生活樹」の実態を反映しているのだらうと考察している。

これらのような指摘も考え合わせると、民話の中にミカンやモモやカキがしばしば登場するのは、これらの果物が古くから日本人の生活と密接に関係していたためであろうと推察される。

なお、登場回数でモモとともに第1位であった「木の実」については、「文出」として登場する例はまったく認められず、すべて「単出」としての表出であった。つまり、「雨が続き、畑だけでなく山の木の実も実らなかった」という表現や、貧しい夫婦の食料の一つとして登場するなど、食べ物不足の状況を表現するときにしばしば登場した。

野菜類についての「文出」はダイコンが最も多く、トウガラシ、カボチャがこれに続いた。具体例として、お婆さんがお坊さんに何か食べさせたかったので隣の家からダイコンを盗んでしまう話や、主人公のキツネが復讐のために藤兵衛に取りつくものの、トウガラシや松の実をいぶした煙で追い払われる話などが認められる。なお、登場回数で第1位になっ

た「野菜」は「単出」としての出出がほとんどであり、「文出」はごく少なかった。

このように、「木の実」や「野菜」のように特定の種類の食物を指すのではなく、グループ名を表す場合は「単出」として出出する場合がほとんどであった。

1,509話に登場する果実類と野菜類について地域的分布をみると、47都道府県中「野菜」は22県、ダイコンは20県、「木の実」は10県に登場し、ほぼ全国にまんべんなく分布していた。これに対して、モモやカキが登場する民話は10県で認められたが、それらは東日本より西日本に多かった。

さらに、果実類と野菜類について、どのような時代の民話に登場しているのかをまとめてみた。果実類が登場する71話のうち、時代が特定できるものは21話(全体の29.6%)で、現代(昭和以降)と江戸時代の話が多かった。

野菜類が登場する民話は149話あり、時代の特定が可能なものは31話(全体の20.8%)であった。それらの中には江戸時代のものが最も多く、次に明治時代のものが多かった。

小林章は『果樹園芸の世界史—果物の世界と野菜の世界—』(養賢堂1996)の中で、江戸時代(17~19世紀)は野菜栽培の華々しさにはとうてい及ばないが、果樹園芸においても新品種の育成や栽培技術の改良が進み、大和(奈良県)のカキや甲斐(山梨県)のブドウ、伏見(京都府)のモモ、越後(新潟県)のナシ、摂津や丹波(兵庫県、大阪府、京都府)のクリ、紀州(和歌山県)のコミカンなどの特産品が全国的に有名になったと述べている。

このことから、江戸時代の民話にはその地方特産の果実や野菜が登場してくることが予想される。モモやカキが東日本より西日本地域の民話により多く登場することは、それらの特産地が西日本により多かったことを反映しているのかもしれない。

なお、調査対象とした民話の中には、それらの背景となる時代が明確でないものも多かった。また、その中に登場する食物の種類についても「さかな」や「お酒」、「イモ」などのように、具体的な食物名でなく単にグループ名として登場しているものかなりの割合を占めていた。このことは、民話が世代を超えて語り継がれるうちに、しだいに内容が変化したり、具体的な食物の名前が忘れられたり、

話し手や聞き手がより親しみやすいような食物へと変化していく可能性があることを示しているのかもしれない。

3. グリム童話および アンデルセン童話

(1) 調査方法

よく知られているように、グリム童話はドイツの民話収集家であり文学者であるグリム兄弟が1812~1857年に発表したものである。その内容はドイツ国内の民話を集めたものとされているが、中には同兄弟の創作も少なくないといわれている。

一方、アンデルセン童話は、デンマークの童話作家であり詩人であるハンス・クリスチャン・アンデルセンが1835~1866年に発表したものである。グリム童話に比べると民話からの影響が少なく、創作童話が多いとされている。いずれにしても、両童話ともに発表以来、ヨーロッパの古典的な童話として人々に広く親しまれている。

ここでは、『完訳グリム童話集(全5冊)』(金田鬼一訳 岩波文庫1979)および『完訳アンデルセン童話集(全7冊)』(大畑末吉訳 岩波文庫1984)に収録されているすべての童話(前者は267話、後者は156話)を対象にして、それらに登場するすべての食物を拾い出し、先述の日本民話のときと同様に『五訂食品成分表』に従って分類した。そして、分類の結果をもとにして、各々の童話に登場するさまざまな食物の種類数と登場回数、さらに各食物が童話の中で果たす役割について、果実と野菜を中心に考察した。

(2) 調査結果

すべての童話のうち何らかの食物が1回以上登場するものは、グリム童話が205話、アンデルセン童話が129話で、それぞれ全体の76.8%および82.7%を占めていた。登場する食物の種類数および登場回数は、グリム童話では134種類で543回、アンデルセン童話では169種類で596回であった。

登場する食物の種類数と登場回数をそれぞれの童話集の中で食物が登場する童話数で割り、1話あたりに登場する食物の種類数と登場回数を算出すると、グリム童話は種類数が0.7種類で登場回数は2.6回、アンデルセン童話では1.3種類で4.6回であった。

表4 グリム童話（全267話）に登場する食物の種類数と登場回数

順位	種類数			登場回数		
	食物	回数	(%)	食物	回数	(%)
第1位	穀類	20	(14.9)	穀類	124	(22.9)
第2位	肉類	19	(14.2)	肉類	85	(15.7)
第3位	果実類	18	(13.4)	果実類	66	(12.2)
第4位	野菜類	11	(8.2)	し好飲料類	66	(12.2)
第5位	菓子類	10	(7.5)	野菜類	33	(6.1)
第6位	豆類	6	(4.5)	乳類	26	(4.8)
第7位	種実類	6	(4.5)	菓子類	21	(3.9)
第8位	油脂類	6	(4.5)	豆類	18	(3.3)
第9位	し好飲料類	6	(4.5)	種実類	16	(3.0)
第10位	砂糖および甘味類	4	(3.0)	砂糖および甘味類	13	(2.4)
第11位	乳類	4	(3.0)	油脂類	13	(2.4)
第12位	魚介類	3	(2.2)	魚介類	10	(1.8)
第13位	調味料および香辛料類	3	(2.2)	卵類	10	(1.8)
第14位	卵類	2	(1.5)	調味料および香辛料類	10	(1.8)
第15位	いもおよびでん粉類	1	(0.7)	いもおよびでん粉類	6	(1.1)
第16位	きのこ類	0	(0.0)	きのこ類	0	(0.0)
第16位	藻類	0	(0.0)	藻類	0	(0.0)
第16位	調理加工食品類	0	(0.0)	調味料および香辛料類	0	(0.0)
—	その他	15	(11.2)	その他	26	(4.8)

食物の分類は『五訂食品分類表』(香川 2002)に基づく。ただし、「その他」は同書によって分類できなかったもの。()の数字は全体に占める割合を示す。

表5 アンデルセン童話（全156話）に登場する食物の種類数と登場回数

順位	種類数			登場回数		
	食物	回数	(%)	食物	回数	(%)
第1位	果実類	31	(18.3)	果実類	123	(20.7)
第2位	肉類	20	(11.8)	し好飲料類	115	(19.3)
第3位	野菜類	18	(10.7)	穀類	87	(14.6)
第4位	し好飲料類	16	(9.5)	肉類	47	(7.9)
第5位	穀類	16	(9.5)	野菜類	35	(5.9)
第6位	魚介類	13	(7.7)	種実類	32	(5.4)
第7位	菓子類	13	(7.7)	魚介類	26	(4.4)
第8位	種実類	12	(7.1)	乳類	25	(4.2)
第9位	調味料および香辛料類	7	(4.1)	菓子類	21	(3.5)
第10位	乳類	5	(3.0)	調味料および香辛料類	17	(2.9)
第11位	砂糖および甘味類	3	(1.8)	油脂類	16	(2.7)
第12位	油脂類	3	(1.8)	卵類	14	(2.4)
第13位	豆類	2	(1.2)	いもおよびでん粉類	10	(1.7)
第14位	いもおよびでん粉類	1	(0.6)	豆類	10	(1.7)
第15位	卵類	1	(0.6)	砂糖および甘味類	8	(1.3)
第16位	きのこ類	0	(0.0)	きのこ類	0	(0.0)
第16位	藻類	0	(0.0)	藻類	0	(0.0)
第16位	調理加工食品類	0	(0.0)	調理加工食品類	0	(0.0)
—	その他	8	(4.7)	その他	9	(1.5)

食物の分類は『五訂食品分類表』(香川 2002)に基づく。ただし、「その他」は同書によって分類できなかったもの。()の数字は全体に占める割合を示す。

次に、日本民話の場合と同様に、両童話に登場するすべての食物を『五訂食品成分表』に従って分類した。

登場した食物のうち最も種類数が多かったのは、グリム童話が穀類の20種類で、以下、肉類が19種類、果実類が18種類、野菜類が11種類、菓子類が

表6 グリム童話(全267話)およびアンデルセン童話(全156話)に登場する果実類の登場回数

順位	グリム童話			順位	アンデルセン童話		
	果実名	登場回数	(%)		果実名	登場回数	(%)
第1位	リンゴ	19	(28.4)	第1位	リンゴ	38	(30.9)
第2位	果物	11	(16.4)	第2位	ブドウ	14	(11.4)
第3位	ナシ	7	(10.4)	第3位	イチゴ	8	(6.5)
第4位	ブドウ	5	(7.5)	第3位	果物	8	(6.5)
第5位	リンゴのような実	4	(6.0)	第5位	オレンジ	5	(4.1)
第6位	野イチゴ	3	(4.5)	第5位	レモン	5	(4.1)
第7位	イチゴ	2	(3.0)	第7位	イチジク	4	(3.3)
第7位	梅ぼし	2	(3.0)	第7位	ザクロ	4	(3.3)
第7位	サクランボ	2	(3.0)	第7位	ナシ	4	(3.3)
第7位	山イチゴ	2	(3.0)	第10位	オランダイチゴ	3	(2.4)
第7位	山ブドウ	2	(3.0)	第10位	スモモ	3	(2.4)
—	その他 ^z	7	(10.4)	第12位	干しブドウ	2	(1.6)
				第12位	イチゴ	2	(1.6)
				第12位	グーズベリー	2	(1.6)
				第12位	サクランボ	2	(1.6)
				第12位	ジャム	2	(1.6)
				第12位	野ブドウ	2	(1.6)
				第12位	山リンゴ	2	(1.6)
				—	その他 ^z	13	(10.6)

z: 登場回数が1回の果実は「その他」とした。

()の数字は全体に占める割合を示す。

表7 グリム童話(全267話)およびアンデルセン童話(全156話)に登場する野菜類の登場回数

順位	グリム童話			順位	アンデルセン童話		
	野菜名	登場回数	(%)		野菜名	登場回数	(%)
第1位	野菜	10	(30.3)	第1位	キャベツ	11	(28.9)
第2位	キャベツ	9	(27.3)	第2位	野菜	6	(15.8)
第3位	かぶら	5	(15.2)	第3位	ドクニンジン	3	(7.9)
第4位	サラダ	2	(6.1)	第4位	ラデッシュ	2	(5.3)
—	その他 ^z	7	(21.2)	第4位	キュウリ	2	(5.3)
				第4位	パセリ	2	(5.3)
				—	その他 ^z	12	(31.6)

z: 登場回数が1回の野菜は「その他」とした。

()の数字は全体に占める割合を示す。

10種類の順であった(表4)。一方、アンデルセン童話の第1位は、果実類の31種類で、以下、肉類が20種類、野菜類が18種類、穀類と嗜好飲料類がともに16種類の順であった(表5)。

最も登場回数が多かった食物は、グリム童話は穀類の124回で、以下、肉類の85回、嗜好飲料類と果実類の66回、野菜類の33回の順であった(表4)。穀類の中では、パンと麦の登場回数の合計が全体の約7割を占めた。また、肉類では「肉」の登場回数が最も多かった。嗜好飲料類では、登場回数の約半数をぶどう酒が占めていた。

アンデルセン童話の方の登場回数の第1位は、果実類の123回で、以下、嗜好飲料類の115回、穀類の87回、肉類の47回、野菜類の35回の順であった(表5)。嗜好飲料類は、ぶどう酒とビールの登場回数とともに多かった。穀類は、パンと麦の登場回数の合計が穀類全体の6割を占めていた。

また、両童話集に共通して登場したいも類およびでん粉類はジャガイモのみで、グリム童話では6回、アンデルセン童話では10回とかなり少ない回数であった。

果実類に限って種類別に登場回数をみると、グリ

ム童話で最も登場回数が多かったのはリンゴの 19 回、第 2 位は「果物」で 11 回、以下、ナシの 7 回、ブドウの 5 回、「リンゴのような実」の 4 回であった（表 6）。

アンデルセン童話でも登場回数が最も多かったのはリンゴで 38 回、第 2 位はブドウで 14 回、以下、キイチゴと「果物」がともに 8 回、オレンジとレモンがともに 5 回であった。このように、両童話集ともにリンゴやブドウなどヨーロッパにおいて古くから栽培され利用されている果実が高い頻度で登場していることがわかった。

野菜類の登場回数は、グリム童話の第 1 位は「野菜」の 10 回で、それに続いて、キャベツの 9 回、かぶらの 5 回であった（表 7）。アンデルセン童話の方はキャベツが 11 回で最も多く登場した。以下、「野菜」の 6 回、ドクニンジン 3 回、ラディッシュ、キュウリ、パセリがいずれも 2 回であった。

日本民話のときと同様に、『森に還ろう』を参考にして登場した果実類と野菜類を一緒にして「文出」と「単出」に分類したところ、「文出」として登場する回数が最も多かった食物はリンゴで、以下、ナシ、「リンゴのような実」、かぶら、キャベツ、山イチゴの順であった。

グリム童話の雪白姫（白雪姫）の話の中でリンゴが重要な役割を果たしていることはよく知られているが、そのほかにもリンゴによく似ている木の実が姫の病気を治す話やリンゴを食べると鼻が長くなる話などがある。また、黄金のリンゴを身分の証しとする話などのように、リンゴが特別な、または高価な果実として登場する例も認められた。

これに対して、アンデルセン童話は、リンゴとナシがそれぞれ 1 回ずつ「文出」として登場することがあったが、野菜類の「文出」はまったくなかった。

とくに、果実類は実のなる木や花、畑といったように、風景の一部として登場することが多かった。とりわけオレンジやレモンは、イタリアやスペイン、ローマといった具体的な地域の風景を表す要素として登場したり、イチジクやザクロが、スペインやイタリアの町やローマの古城などの風景の一要素として登場したりした。さらに、バナナが新オランダ州（オーストラリアのもの名前の）の風景の要素として登場する例も認められた。

このように、アンデルセン童話はグリム童話とは

だいぶ趣を異にしており、創作童話が多いために具体的な地名が登場することが多く、その地域の風景を生き生きと描写するために多くの種類の果実が登場しているのかもしれない。このことは、アンデルセン童話では果実類や野菜類があまり重要な役割を果たしていない理由の一つにもなっているものと思われた。

4. おわりに

以上に述べてきたように、日本民話には主食である米を含む穀類が数多く登場するとともに、海に囲まれた島国で海産物資源が豊富である日本の国土を反映して、魚介類の登場回数も多いという特徴が認められた。

一方、グリム童話やアンデルセン童話には、ヨーロッパで主食としている国が多いパンをはじめとする穀類の登場回数が多く、また、かつて狩猟や牧畜が盛んであったことを反映して、肉類の登場も多いという特徴があった。

果実類に着目すると、日本民話ではモモやカキが多く登場したのに対して、グリムおよびアンデルセン童話ではリンゴやブドウ、さらにナシの登場回数が多く、それぞれの地域で古くから利用され栽培の歴史が長い果実が上位を占めていることがわかった。

とくに、日本民話ではミカン、モモおよびカキが、グリム童話ではリンゴがそれぞれの話の中で重要な役割を果たす「文出」として多く登場していることから、洋の東西を問わず、これらの果実がその地域の人たちのいわば「生活樹」として人々の生活に深く関わっていたことを反映しているものと思われた。

一方で野菜類は、日本民話、グリム童話、アンデルセン童話のいずれにおいても、「野菜」という単なるグループ名で登場することが最も多く、話の中であまり深い意味を持たない「単出」として登場するケースが多かった。野菜類はこのように、民話や童話の中であまり重要な役割を果たしていないが、かなりの頻度で文中に登場する代表的な食物の一つであることには変わりはない。

引用文献

- 今井敬潤 1990. 柿の民俗誌—柿と柿渋. 現代創造社. p59-63.
香川芳子 2002. 五訂食品成分表. 女子栄養大学出版部.
河合雅雄 2003. 森に還ろう. 小学館. p156-164.

小林 章 1996. 果樹園芸の世界史—果物の世界と野菜の世界—
養賢堂. p171-173.
平 智・山崎雪恵 2007. 日本民話に登場する果物と野菜をはじめ
とする食物について. 人間・植物関係学会雑誌 7(別

冊):52-53.

平 智・川野美保・小岩井 優・宮沢喜一 2008. グリム童話および
アンデルセン童話に登場する果物と野菜をはじめとする食物
について. 人間・植物関係学会雑誌 8(別冊):5-6.

外国文献抄録

FORMOSAはキンギョソウの花発生過程における細胞分裂と細胞伸長を制御する

Benarroch, L. D., B. Causier, J. Weiss and M. E. Cortines
2009. FORMOSA controls cell division and expansion
during floral development in *Antirrhinum majus*. *Planta*
229: 1219-1229.

花の発生は、花序分裂組織から花原基が形成される
ところから始まり、花原基で花器官のアイデンティティが決定
され、その後成熟した花へと成長する。一般的に花のサイ
ズは、細胞分裂と細胞伸長の2つの現象が協調的に働くこ
とによって決められる。

本研究では、花のサイズが大型化するキンギョソウ
*Antirrhinum*の *formosa* (*fo*) 変異体について、その表現型
の解析と、細胞分裂・伸長に関わる遺伝子発現について調
査した。

変異体の表現型では、花器官への影響が大きく、花弁や
雄しべの器官サイズが増大していた。しかし、それら個々
の細胞サイズは縮小しており、器官サイズの大型化は、細
胞分裂が活発に起こり、細胞数が増加したため起こると考
えられた。そこで、花器官における細胞分裂活性を調べる
ため、細胞分裂を促進する遺伝子であるアラビドプシスの
AINTEGUMENTA (*ANT*) のオーソログをキンギョソウ (*Am-ANT*)
から単離し、*in situ hybridization*によって、野生型と
変異体における発現パターンについて比較した。その結果、
野生型では花芽を有する花序や花芽分裂組織、発生初期の
花原基で発現がみられ、発生の進行とともに低下し、成熟
した花ではごく一部の花弁領域と胚珠に限定されていた。
一方、変異体では、花序や花原基での発現レベルは野生型

と比べて増加しており、反対に花弁では低下していた。変
異体の花弁については、さらに生育ステージごとに、細胞
分裂に関する他の遺伝子 (*CyCD3a*, *HA*) の発現について調
べたところ、花弁の発生後期において上昇がみられ、細胞
分裂が盛んに起こっていることが明らかとなった。以上よ
り、*FORMOSA*は、*Am-ANT*の発現を抑えることで花発生初期
の細胞増殖だけでなく、花弁の発生後期の細胞増殖につい
ても抑制していることがわかった。

さらに、変異体における細胞伸長への影響についても解
析した。花弁特異的に細胞伸長を抑制するアラビドプシス
BIGPetal (*BPE*) 遺伝子のホモログ (*Am-BPE*) を単離し、
発現パターンについて調べた。変異体の花弁では、*Am-BPE*
の発現が著しく上昇しており、表現型の解析でみられた細
胞サイズの小型化と整合性があった。これにより *FORMOSA*
は、花弁の細胞肥大を促進する働きが示された。

以上、*FORMOSA*は花器官特異的に働いており、その機能
は細胞分裂の抑制および細胞伸長の促進という2つの作用
を持つことが示された。また、器官サイズ制御において、
細胞数が減少すると、正常サイズを維持するためにそれを
相殺するかのように細胞肥大が亢進する補償作用が知ら
れているが、*FORMOSA*は、このメカニズムを介して、細胞
分裂から細胞肥大への移行を誘導し、器官サイズを制御し
ている可能性も考えられた。

(東京大学大学院農学生命科学研究科園芸学研究室
新居加恵子)